

# 小規模大学学生の学習意欲を向上させるための諸考察

Towards Motivating Unmotivated Students in Small Japanese Universities

スティーブン・ロイド<sup>1</sup>

Steven Lloyd

## 概要

日本の大学は、国内の人口の減少、および政府における政策の見直しにおける危機に直面している。この結果、学習意欲のある学生は、以前よりも容易に大規模有名大学に入学することが可能になり、小規模大学には大学生活に適応が困難な、意欲に欠ける学生を受け入れることとなった。そのような新しい現実に適応できない大学は、究極的には生き残ることができないであろう。この論文は、このような小規模大学に課せられた課題に対する提言を主目的とする。その提言とは、学生に将来に向けて必要とされるスキルを身につけさせること、学生の内なるモチベーションを上げる工夫をすること、モチベーションの低い学生を教育させるにふさわしい環境を創造することである。

**キーワード：**小規模大学、学習意欲に欠ける学生、モチベーション、教育環境、教育

## Abstract

Universities in Japan are facing a crisis of falling population and changing government policy. This will hit small private universities the most as the more academically-minded, more motivated students find it easier to enter big, prestigious universities, as they will be left with students less able to adjust to university life and less motivated. Universities that do not adjust to the new reality will ultimately find themselves going out of business. This paper puts forward a selection of ideas for discussion. All of the ideas are aimed at either: giving the students the necessary skills and internal motivation to study; or at creating an environment more suitable for educating non-academic and unmotivated students. The objective of the paper is to provoke discussion and generate ideas.

**Keywords:** small universities, unmotivated students, motivation, teaching environment, education

## 目次

1. 導入
2. やる気のない学生達
3. 学生をやる気にさせる
4. 結論

### 1. 導入

日本中の小規模大学は、減少する学生の数、学力の低下、そして大学の自負心の危機に瀕している。多くの短大や専門学校などが既に姿を消している。そして、もしこの危機にあえて立ち向かい、生き残るための具体的な対策を取らなければ、多くの小規模大学もやがて同じ道をたどるだろう。小規模大学の直面している問題の一つは、今までの小規模大学に入学していた学生が、入学基準を低下させているより大きい有名大学に入学しているという事実である。これは小規模大学には、学習能力の低い学生が残されたという意味である<sup>2</sup>。このような学生を更なる高等教育に進めるように準備をさせる事、ひいては将来の仕事の場で力を発揮できるように準備させる事が、小規模大学の成功、つまり生き残りを決定する鍵であり、挑戦であると断言できる。

この論文は、教育に幻滅した学生や、将来の目標を欠いた学生、4年間の大学生活で得たものを生かすのに必要な学習スキルや自制心を欠いた学生を、いかに将来に向かい準備をさせるかを議論するものである。

しかし、この論文の主旨とは別に、やる気があり目標を持った、学習スキルを持ち自分を啓発し、大いに努力している学生達ももちろん大勢いる事を述べておく。この論文は彼らを対象にはしていないが、彼らもまたこの論文の第二部で挙げられている提案から利益を得るであろう。

### 2. やる気のない学生達

もし学生達に彼らの大学への進学理由や卒業後の進路計画について尋ねてみると、どのような反応が返ってくるだろうか。恐らく多くの場合は、何の事を聞かれているのかわからないような表情であろう。多くの学生にとっては、高校での教育の経験は、希望がなく、実りもなく、意味もなく、挑戦し甲斐もなく、そして極論を言えば、人生の次の段階である、更なる高等教育や仕事に就くための準備という役割を果たしてない。問題はどこにあるのか。学校、社会、政府の教育方針、若者文化、躰の甘い親達、これらはこの論文の範疇外である。原因は何であれ、結果は同じである。やる気のない学生達である。この

やる気の欠如は以下に述べる多くの点で明らかに認識されている。

- ・好奇心の欠如、倦怠感、授業中の居眠り（携帯電話の使用を含む）
- ・学習スキルとクラスでのノートテイキングの欠如
- ・低い記憶力
- ・低い出席率、高い中退率
- ・宿題の未提出
- ・先生や他の学生達への礼儀や敬意を欠いた態度
- ・騒いだりしてクラスを破壊させる行動
- ・課外活動への低い参加率
- ・教育と将来のキャリアに対する目的の欠如

勿論上記の内容が学生の無気力を象徴する全ての行為ではなく、他の教員も更に上記に追加することができるだろう。もちろん中には大学生活に基本的に適応できない学生も少数おり、彼らには他の道に進むように勧めることもできる。しかしながら、私はここで、これら全ては大多数のやる気のない学生達にとって、改善する事ができると論じたい。

大部分の学生は不完全な教育に苦しんでいる。勉強のスキルが不足し、自分の学習能力や将来のキャリアに自信がない。しかしこれらはそれまでの学生自身と教師達から生まれたものだ。大学は高校と非常に違う環境にあり、多くの変化があり学生達の中には入学当初に当惑するものも存在する。ある者にとって高校は失望する経験で、時間の無駄と感じたであろう。加えて、殆どの学生達は将来何をしたいのか全く考えておらず、又、どのような選択肢があるのかもわからない状態だ。これらの問題を克服する事が、今、大学が直面している課題である。

既にもう遅いと言う者もいるかもしれないが、大学1年の時という、早い段階から繰り返し行う抜本的な改革が、学生をその後ずっときちんとした軌道に乗せる事ができると私は考える。これには学生に一丸となって示せるように、大学の教員と職員双方の一致団結した努力が必要とされる。しかし、次に述べる方法がいったん定着すれば、学生と教員双方に利益をもたらす。特に教員にとっては上手に教える事ができたという経験が更に満足感を得られ、やりがいのあるものとなるだろう。

### 3. 学生をやる気にさせる

学生達がやる気になる環境を提供することは、彼らに希望と支援、そして学生自身の教育と将来の目標を持たせる事につながる。以下はそのような環境を作り始めるのに有益な

提案である。

・第一学期の勉強準備

1年生の第一学期は学生の大学生活への準備期間に充てるべきである。これは短期間のオリエンテーションで済ますのではなく、一学期全てを準備期間に充てるという方針を持つべきである。具体的には、学生達は通常の授業の代わりに、学習スキル、ノートテイキング、日本語ライティング、コンピューター・スキル、プレゼンテーション・スキル、クリティカル・シンキング（論理的思考）、英語、経済やビジネス入門のコースを履修する。又、将来のキャリアプランや、大学が4年間で提供するコースとそれがどのように進路に結びついているかについて徹底的な論議もされるべきである。それぞれのコースについて紹介する講義を、1つか2つ（つまり、14～15週間の1学期中に1講義程度）開催し、学生が各コースについて広範囲な理解を持ち、これから自分の進む分野の方向性を決定できるようにするべきである。

・学生は大学入学第一日目から責任ある大人として扱われるべきである

学生は自分自身の教育について責任の所在が自分にあり、その選択は将来の自身の生活に影響するという事を明確に認識することにより、学生はより自発的に自分自身の教育を遂行するだろう。

学生の権利と責任、そしてそれを取れない場合に起こる短期的な結果（単位を取れない等）や、長期的な結果（就職できない等）を大学は明確に提示するべきである。しかしながら、これを取り巻く学校環境は規則で縛るというよりは寛容に、一定のルールの中で自由に活動できるように推奨されるべきである。

・必要な出席と課題

重要な2つの責任は適切な出席状況と課題提出である。適切な出席状況とはクラスや講義中に集中することも含まれる。居眠りや講義内容とは関係のない本の読書、携帯電話の利用などは咎められ罰せられるべきである。課題は個人向けに設計されるべきで、他の学生のコピーや、インターネットや教科書のコピーではなく、自ら考えたり教材を理解する事が必要とされるべきである。また課題は次の授業の前の晩に（又は数分前に）急いで行うべきではない事も学生に理解させる。これらは授業の1～2日前に提出日を設けることで簡単に実行できる。

・欠席とその他の問題は個人的に、親と一緒にフォローアップするべき

学生の直面している多くの問題はカウンセラーや、適切な教員との面談で個人的に相談できるようなシステムを作ることで、解決への手伝いが可能となる。学生の欠席理由の中

には家庭の様々な事情から起因することもあり得るが、そのような場合においては、教員と親との面談によってその問題性が親にも認識され得る。もちろんもっと深刻な家庭問題がある学生は更なるケアが必要であるが、ひいてはそのような機会を設けることによって親が子供の教育状況を認識し、子供の学生生活の改善を推奨するようになる効果も得る事ができよう。

- ・全てのレポートや課題は可能な限りコンピューターを用い、標準化されるべき

課題やレポートや論文のフォーマットはできる限り大学内で統一されるべきである。スタイルマニュアル（文字の大きさ、フォント、フォーマット等を規定したもの）を学生に配布し、第一学期の学習スキルの授業できちんと教えられ、全ての授業で徹底されるべきである。これにより学生が、より明確に考え、課題を適切に計画することが可能になる。更に伝達事項において、学生が教員にEメールを使用することや、それ以外にも可能な限りコンピューターの使用を義務付けることにより、コンピューター能力が高まり、かつ unnecessary 紙代を削減でき、学生が就職した際のオフィス環境に備える事ができる。

- ・講義はできるだけ実践的に、学生が関連づけできるように

講義とは、集中力を持って聞いたり適切にノートを取ったとしても、非常に受身な学習形態である。学習意欲が少ない学生は、簡単に注意散漫になり居眠りをしてしまう。能動的に学生を活発に参加させるようにしたり、授業のペースを変えたり、実際の体験談をしたりすることで、学生を能動的に参加させ、様々な方法で提示される題目を理解するよう促す事ができる。更に、講義の内容は先生によって再考されるべきである。無作為にケースを取り上げ、例えばトヨタやソニーの企業史を教えることは、興味深いかもしれないが、卒業生が就く仕事のケーススタディとしては適切ではない事が多い。

- ・地元のビジネス人達の参加

地元の中小企業のビジネスパーソン（できれば若い人達）を招待し、彼らの経験を語ってもらう事で学生達のやる気を喚起させ、学生と教員双方にとって実際のビジネスの現場を洞察する機会が与えられる。又、講義内容が実際の世界といかに関連深いかを明確に認識するよい機会となる。

- ・できるだけ多くの資格コースを

学生に実際の仕事場で使える資格を与えるのは決して悪い事ではない。又、より幅広い授業や講義に挑戦することで、学生がより学術的資質を持つようになる。

・基礎ゼミは学習プロセスを徹底させるべき

通常の基礎ゼミで、学生がノートテイキングをきちんと行い講義を理解しているかを定期的にチェックするべきである。それは自分でまとめた講義のノートを提出させることで可能である。又、学生の興味のある点／不明な点などは全てのゼミの先生から講師に伝えられ、詳細を議論し強化する事ができる。基礎ゼミは学生にとっての関心事や心配事を議論し、誤解している点を正すことができるという意味において不可欠な科目である。教員にとっても学習プロセスを改善するためのフィードバックを得られるという意味において、非常に有益な機会である。

・個別指導システム

大規模教室で行い、かつ難易度の高い講義で、しかもその分野専門のスタッフが複数いる場合は、西洋式の個別指導システムが望ましいかもしれない。つまり、教員の指導のもとで、学生は少数のグループに分かれ講義内容や質問を議論する。これらは30分あれば十分である。(恐らく全体の学習単位を90分に保つために講義を60分に短縮できるであろう。)

#### 4. 結論

大学の目的とは、相対的にレベルの高い学生には質の高い教育を提供し、レベルの低い学生には具体的なゴールやスキルを掲げさせることである。後者の学生グループの割合は増えており、もし大学が彼らのニーズを満たすことができなければ、それは大学の責任である。(これらのレベルの低い学生が存在することは個々の大学のせいではないが、日本の大学全体の問題である。) どのように、何を教えるかは学生のレベルにあわせて適応させるべきである。これは科目の学術的要素を少なくすべきだ、とか、よりビジネス志向であるべきだということではなく、ただ、科目の内容はより現実社会と関連性があり、より適切な方法で教えられるべきであるという事を強調したい。

上記に挙げた新しい提案やアプローチを実行させるには、全ての教職員の一致団結した体勢を学生に向ける事が必要とされる。大学関係者間の合意が成功には不可欠である一方で、大学の将来は新しい学生の質に適応させる事にかかっている事を明確に提示する事が大学のリーダーシップの役割である。新しいプロセス導入の成功と、その後の絶え間ないプロセスの改善が、より大きな自信を学生に持たせ、より良い就職ができる卒業生を輩出し、ひいては大学の成功と安泰を約束するのである。

注

- 1 この論文に記述されている提案のいくつかは共栄大学のニコラス・バフトン教授と共に議論し作成された。英語からの翻訳は木村幸子による。
- 2 Shephard, J. (2008) 'Desperately Seeking Students' from *Guardian.co.uk* accessed Nov. 24<sup>th</sup> 2008 <http://www.guardian.co.uk/education/2008/jan/15/internationaleducationnews.highereducation>; Eades, J.S. *et al* (eds.) (2005) *The 'Big Bang' in Japanese Higher Education: The 2004 Reforms And the Dynamics of Change* (Trans Pacific; Melbourne); McVeigh, B. J. (2002) *Japanese Higher Education As Myth* (Sharpe, New York)